

海外の教科書を読む

各国の児童生徒が学んでいる教科書は、その国の人々の成長の背景をなす文化、価値観、常識などを理解する手がかりになるといえる。

海外の教科書を翻訳したシリーズがいくつかある。初期のものには、帝国書院刊「全訳世界の地理教科書」全二巻（一九七七～七九年）、および「全訳世界の歴史教科書」全三巻（一九八〇～八三年）がある。欧米諸国中心だが、途上国もいくつか含まれている。「世界の教科書Ⅱ歴史」全二巻（ほるぷ出版 一九八～八五年）には、トルコ、中国、エジプト、韓国、インドネシア、メキシコ、ブラジル、パキスタン、ベトナムの巻がある。「対訳 世界の教科書にみる日本」（国際教育情報センター 一九九三～九五）は、各国教科書から日本に関する記述を抜粋して原語と対訳式で紹介するシリーズ。中国、韓国、フィリピン、アメリカ、ヴェトナムの五編がある。

石井美千子

書が一種類翻訳されている。中国も小学校から高校まで四種ある。このシリーズから特徴あるものをあげてみよう。チベット中央政權文部省著／石濱裕美子・福田陽一訳「チベットの歴史と宗教―チベット中学校歴史宗教教科書」（明石書店 世界の教科書シリーズ三五 二〇一二年）は、インドのダラムサラなどのチベット人居住地にある「チベット子供村」で使われている教科書である。中学の段階で仏教にもとづく論理学を教えていることに驚かされる。ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古・民族学研究所編・村上昌敬訳「ロシア沿海地方の歴史 ロシア沿海地方高校歴史教科書」（同シリーズ八 二〇〇三年）は、広大なロシアの極東地域の生徒を対象とする教科書で、開拓、移住、近隣アジア諸国との関係などの歴史が記されている。

単発の翻訳書に、ナミビア独立支援キャンペーン・京都訳「わたしたちのナミビア」（現代企画室 一九九〇年）がある。ドイツ、南アフリカの支配を受けてきたナミビア人が亡命者の学校で使うために作成したもので、ナミビア人自身による最初の学校教科書である。

藤原聖子「世界の教科書でよむ（宗教）」（ちくまプリマー新書 二〇一一年）は、米、英、仏、独、およびトルコ、タイ、インドネシア、フィリピン、韓国の宗教もしくは歴史の教科書から各国の宗教のありかたを読み解こうとするもの。

次に「教科書問題」をめぐる文献をとりあげる。日韓歴史教科書研究会編「教科書を日韓協力で考える」（大月書店 一九九三年）は、日韓の研究者による合同研究会の議論を紹介し、課題をあげている。齋藤一晴著「中国歴史教科書と東アジア歴史対話 日中韓三国共通教材づくりの現場から」（花伝社 二〇〇八年）は、日中韓共通歴史教材委員会による共通教材「未来をひらく歴史 東アジア三国の近現代史」（高文研 二〇〇五年）の作成過程を紹介するとともに、中国の歴史教科書の変遷を詳述している。中村哲編著「東アジアの歴史教科書はどう書かれているか 日・中・韓・台の歴史教科書の比較から」（日本評論社 二〇〇四年）も国を越えた研究会の成果で、日本の高校教諭や、中国、韓国、台湾の博士課程留学生らが各国の歴史教科書を分析している。菊池一隆著「東アジア歴史教科書問題の構図 日本・中国・台湾・韓国、および在日朝鮮人学校」（法律文化社 二〇一三年）は、中国現代政治経済史を専門とする著者が各国の歴史教科書

における史実の描かれ方を綿密に比較検討する。並木頼寿・大里浩秋・砂山幸雄編「近代中国・教科書と日本」（研文出版 二〇一〇年）は、戦前期にすでに日中間で発生していたという教科書問題を初めてとりあげた研究書である。

歴史教科書のあり方を検討する政治家グループの活動を伝える資料として、日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会編「歴史教科書への疑問 若手国会議員による歴史教科書問題の総括」（展転社 一九九六年）がある。史実をめぐって見解を異にする論者との議論が詳細に記録されている。

海外の教科書の翻訳や論考の対象は歴史教科書が多いが、その他の科目の教科書も各国特有の文化や教育のありかたが読みとれる一次資料といえる。外国の教科書はいくつかの図書館で閲覧可能である。教科書研究センター附属教科書図書館には、世界四六カ国の二万冊を超える教科書がある。ACCU（ユネスコアジア文化センター）ライブラリーは、一九七〇～八〇年代のアジア諸国の教科書を約三〇〇〇点所蔵。アジア経済研究所図書館でも網羅的ではないが、韓国、タイ、インドネシア等の教科書を所蔵している。

（いしい みちこ／アジア経済研究所 図書館）